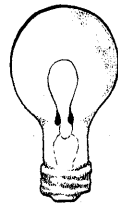


## 震災後の子どもたち(9)

# 大好き！くくるる滑り台



前澤 美津子

### はじめに

一九九五年一月十七日未明のあの大地震は完成して四か月足らずの御影保育所の可愛い門もなぎ倒し、創立二十六周年を数える園舎南棟のジョイントに隙間が空き、ピロティの柱に亀裂が入り、地面に陥没し立入禁止という事態となった。

子どもたちの大好きだった南側畑の中の石燈籠の屋根が見事に転がり落ち、所庭(保育所の庭)の深

くて太い十数本の亀裂は、つい三日前迄の平和で、どかな保育所の姿とは全くかけ離れたものだった。

### お星さまになったK君

自宅の被災もそこそこに、交通遮断の中、徒歩で、自転車、何とか自力で出勤した職員は子どもたちの安否確認の末、悲しみのどん底に陥った。我が保育所六十三世帯のうち全壊焼十世帯、半壊焼十七世帯、一部損壊三十一世帯という被災状況の中、

○歳児のK君の自宅では、若い母親がかばうように上になり、母子共に亡くなったのである。

K君の死顔は傷一つなく、今にも息を吹き返し片言で語りかけてくれそうな表情だったそうである。

### 引越、そして再開

職員は悲しみに暮れるゆとりもなく、働きたくても子どもを預けなくては働けない保護者の為、生活の立て直しに心を砕く保護者の為に、御影で保育再開できない代わりに東灘区内、区外、神戸市外の各保育所に子どもたちを緊急特例入所児として受け入れていただくことになった。

その後のアンケートで把握できたことだが、その当時の子どもたちの家庭での変化には、おねしょ・チック・夜泣き・赤ちゃん返り・物音に敏感・暗くすると眠れない・トイレに一人で行けない・恐がり・家に入れない……等、多種多様な心の変化があり、保護者も職員も一日も早い御影保育所の再開を

望んだものである。

結局、元の園舎の補修工事の間、他の空家となった近隣の保育所に、そっくり引越して新年度四月からの保育再開となった。数えて、あの震災の日から二か月半を経過していた。



▲畑の中の屋根の落ちた石燈籠

## 廊下をぐるぐる

仮住まいの保育所は御影とは違い、木造で中央のトイレから廊下伝いに各保育室他、全室に行き来ができるという小じんまりとした楽しいたずまいであった。但し、廃棄寸前の建物なので喜々として走り回る子どもたちの歓声と木造のきしみと揺れは毎日「余震」そのものだった。

住めば都……よちよち歩きのお歳児が廊下伝いに年長児の保育室に遊びに行くかと思えば、兄妹同士で遊びや給食の途中でも交流できるアットホームな雰囲気は、震災後の不安の上ない子どもたちの精神状態をサポートするのに最適であったかもしれない。

## 子どもたちの姿

子どもたちは安心して自分そのものを出しきっていた。

コーナー遊びのままことから突如始まる「地震ごっこ」。砂場での穴掘りが「ガス工事ごっこ」。所庭のベンチや大カゴを集めて狭い空間を作り、入り込む「避難所ごっこ」。

震災の影響を受けたと思われる様々な遊びを保育者はじっくりと見守り、最後は見届ける毎日であった。

しかし、あの震災で家屋の下敷きになり、やっとのことで救出されたという恐い体験をした四歳児のS君は昼寝中に恐い夢を見ては泣きじゃくる。

又、当時生活の立て直しの為に両親と別れ、長期間遠い田舎に預けられた四歳児Yちゃんは、毎朝登所時、母親と別れ際に大泣きする。こういった子どもも不安な気持ちは働く母親の心理状態と密接な関わりを持つ。震災後の生活の立て直しの為に奔走する母親の疲れも出る頃である。

職員は担任を中心に話しあい、連絡を密にし子どもも保育所での生き生きとした姿を毎日のように母



▲大好き！ くるくる滑り台

こまこまとした荷物を乳母車や台車で前もって運びながら、補修工事終了の様子を見に行く保母に、「保育所、きれいになっとった？」「きりん組のおへや、大丈夫？」と必死で聞き出そうとする年長児。その声に応える如く職員は平常保育の中、子どもの昼寝時に交代で出かけ、各保育室の受入れ準備にあたり、サビだらけの固定遊具は職員のにわかベンキ屋で

親に伝え、ゆっくりと母親の心の底にある思いを聞き出し、共に考え、励ますように努力した。

母親の心の立ち直りと、安定が戻ってきた晩秋の頃、S君とYちゃんにも心からの笑顔が戻ってきた。

十二月に入り、引越後八か月となった頃、明るい子どもたちとは逆に、通勤に不便な保護者からは

「御影の補修工事はまだ終わらないんですか？」の苦渋の声があちこちから聞こえ始めた。

「ほんものの保育所や！」

十二月のクリスマス会の日程を早め、とうとう中旬の土曜日と御用納めの最終日の二日間に分け、元の御影保育所への引越が実施されることになった。

見事に生まれ変わった。数回に及ぶ完了検査と清掃修理の末、何とか受入れ準備は整った。

平常保育を実施しながらの二日間の引越は、保育課、福祉事務所、ボランティアの方々、保護者など多大なバックアップを得て、職員一丸となつての、まさに大移動であつた。

新年明けて、一九九六年一月四日から元の御影保育所での保育再開。

子どもたちも保護者も職員も、どんなにか待ち望んだ瞬間であつただろう。

「先生！ほんものの御影保育所やなあ！」大はしゃぎでスクーターを乗り回し大好きならせん滑り台に挑戦する。

御影保育所の名物でもある避難用のこの滑り台は子どもたちいわく「くるくる滑り台」で、〇歳児以外の子どもたちが滑ることのできる、まさに夢の滑り台である。

## おわりに

新年再開後二週間……あの忌まわしい一月十七日からちょうど一年。

保育所で唯だ一人亡くなった当時〇歳児クラスのK君の追悼の集いで、又新たな涙を流しながらも、我々職員は心に誓う。

これからも逞しく明るい御影の子どもたちに負けないように、前を向いて生きることの素晴らしさ、大切さを子どもたちに伝えていくことを。

引越に始まり引越に終つたこの一年。

自らの心のケアはもちろん、子どもたち、保護者をしっかりサポートする中で、この紙面には書き尽くせない程の数々の貴重な体験こそが、人間として、保育者としてのこれからの原動力となろうことを願わずにはいられない。

(神戸市立御影保育所)